

芥川龍之介研究：「トロッコ」の考察を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009511

芥川龍之介研究

—「トロッコ」の考察を通して—

A Researching Ryunosuke Akutagawa
through Japanese Language Teaching Materials “*Torokko*”

大 塚 浩
Hiroshi OHTSUKA

（平成 27 年 10 月 1 日受理）

はじめに

芥川龍之介（1892～1927）の作品「トロッコ」は、大正11（1922）年3月1日発行の雑誌「大観」（実業之日本社）に発表されたのが初出である。翌年の大正12（1923）年5月18日に刊行された創作集『春服』に収載されたものが初刊本となる。芥川の作品「トロッコ」は、発表以来数多くの書物に収められ、読み継がれてきている作品の一つである。

作品中の「軽便鉄道敷設」とは、神奈川県小田原と静岡県熱海間を結ぶための線路敷設工事を指している。雨宮敬二郎によって設立された豆相人車鉄道株式会社は、明治28（1895）年7月に熱海－吉浜間で営業を開始し、翌29（1896）年3月には小田原－熱海間を開通させ、同区間を約四時間で結んでいた。その後、明治41（1918）年7月に豆相人車鉄道株式会社は、軽便鉄道に転身し、小田原－熱海間を約三時間で結び時間短縮を図っている。つまり、作品中に登場する「軽便鉄道敷設」は、この人車鉄道から軽便鉄道への切り替え工事のことである。この小田原と熱海を結ぶ軽便鉄道の起点は、神奈川県小田原市西海子（さいかち）小路の西の突き当たりに位置していた。小田原－熱海間は、地勢学的にも起伏の激しい地形が連続して存在しており、約26kmの距離を有していた。

芥川の作品「トロッコ」には、ベースとなる素材が存在していた。その素材は、芥川龍之介に憧れて上京し、芥川と知遇を結んでいた神奈川県足柄下郡吉浜村（現、神奈川県足柄下郡湯河原町吉浜）出身の力石平蔵（平三）から得たものであった。

戦後中学校国語教科書教材としては、昭和25年版の秀英出版（中学2年生用）、三省堂出版（中学1年生用）、大修館書店（中学1年生用）をはじめとして、以後長年掲載され続けている。また、「トロッコ」は、中学校国語教科書教材としてだけでなく、小学校国語教科書教材としても、昭和36年から昭和39年まで光村図書（小学6年生用）に掲載されていた時期も存在していたのである。

芥川龍之介の「トロッコ」については、拙稿「中学校国語教科書教材研究」において、作品「トロッコ」の成立過程、登場人物としての土工たち、念願のトロッコ、良平の苛立ちと不安について考察してきている。

そこで本稿では、「芥川龍之介研究」の一環として、芥川の作品「トロッコ」の考究を通し、

土工たちから告げられた「ある言葉」、良平の危機意識、「ある言葉」は、土工たちの「裏切り」なのか、良平の自省と決断について考察を進めていくものとする。

Ⅰ. 土工たちから告げられた「ある言葉」

二軒目の茶店の前で、再度一人きりで残された良平は、トロッコに腰を掛けながら、家に帰ることばかりを気にしている。この時の良平は、ただ漫然と腰掛けていることもできず、立ち上がって「トロッコの車輪をけってみたり」、「一人では動かないのを承知」で、「うんうんそれ（トロッコ）を押してみたり」して気を紛らわせているしかなかったのである。本文では、次のように記している。¹⁾

その坂を向こうへ下りきると、また同じような茶店があった。土工たちがその中へ入ったあと、良平はトロッコに腰を掛けながら、帰ることばかり気にしていた。茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる。」——彼はそう考えると、ほんやり腰掛けてもいられなかった。トロッコの車輪をけってみたり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押してみたり、——そんなことに気持ちをまぎらせていた。

ところが土工たちは出てくると、車の上のまくら木に手を掛けながら、無造作に彼にこう言った。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向こう泊まりだから。」

「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するずら。」

良平は一瞬間あっけにとられた。もうかれこれ暗くなること、去年の暮れ母と岩村まで来たが、今日の道はその三、四倍あること、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならないこと、——そういうことが一時にわかったのである。

二軒目の茶店から出てきた土工たちは、日没が迫り内心帰路の心配をしている良平に対し、無造作に「ある言葉」を告げる。すなわち、土工たちの投げ掛けた「ある言葉」とは、「われはもう帰んな。おれたちは今日は向こう泊まりだから。」「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するずら。」という発言がそれである。

田近洵一は、この土工たちの発言について次のように述べている。²⁾

二人の土工はやさしく親切だった。彼らは最初から快く良平を受け入れてくれたし、「新聞紙に包んだ駄菓子」もくれた。最後まで思いやり深く、「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するずら。」といって、良平の身を案じてもくれた。思えば誠実な人からのふたりであり、もちろん、何の悪意もあらうはずはなかったが、にもかかわらず、良平は、結果としてひとりほうり出されることになった。「われはもう帰んな。おれたちは今日は向こう泊まりだから。」ということばは、良平にとって冷たい他人のことばだったのである。いい人たちなのに、深いところでは結局他者でしかない——それは良平にとっては初めての他者経験だったともいえよう。

田近は、良平に対し土工たちは「最後まで思いやり深」かったとしながらも、「結果として」良平は、「ひとりほうり出されることになった」と捉えている。良平にとって土工たちの言葉は、「冷たい他人のことば」であり、「いい人たちなのに、深いところでは結局他者でしかない」ということを知った「初めての他者体験」であったと述べている。

また、田島伸夫は、この場面について次のように述べている。³⁾

この土工たちは、“帰ることばかり気にしていた”良平、「もう日が暮れる」と考え、“ほ

んやり腰掛けてもいられなかった。トロツコの車輪をけってみたり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押してみたり、——そんなことに気持ちをまぎらせていた。”という良平の心を察するどころか、逆に冷たく突き放す。(中 略) 土工たちはうわべはやさしく親切な人物に描かれている。トロツコを押させてくれたし駄菓子もくれた。良平を案じるようなことばもかけてくれた。ところが、そういう言葉や行為を別にして、結果から考えてみるとどうだろう。(中 略) やさしく親切だと信じていた土工たちに裏切られ、他人の冷たさを初めて知った体験である。

ここで田島は、「土工たちはうわべはやさしく親切な人物」として描写されているが、結果論として良平は、その「やさしく親切だと信じていた土工たちに裏切られ、他人の冷たさを初めて知った体験」であったと把握している。つまり、良平にとって土工たちのこの言葉は、「裏切り」の言葉であり、「他人の冷たさ」を思い知らされた発言であったと主張している。

さらに、関口安義は、この場面の良平について次のように述べている。⁴⁾

良平の恐れと悲しみは、突如襲ってくる。「行く所まで行き着かなければ……」と考えていた良平に、茶店から出てきた二人の土工は、「われはもう帰んな。おれたちは今日は向こう泊まりだから。」とそっけなく言う。これまで「何だか親しみ易いやうな気」がして、「優しい人たちだ」と信じて行動を共にしてきた大人たちから不意にこう言われ、良平は裏切られたように思う。それゆえ「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するずら。」という一見親切そうなことばも、今や良平の気持ちには素直に入っていない。自分の気持ちの通じない断絶の悲しみである。

ここで関口も、土工たちに帰るように告げられる前まで、良平は土工たちのことを「『何だか親しみ易いやうな気』がして、『優しい人たちだ』と信じて」いたからこそ「行動を共にしてきた」のであると考えている。しかし、そうした土工たちに帰るように告げられた良平は、「裏切られたように思う。」と捉えている。さらに、この土工たちの言葉は、「良平の気持ちには素直に入っていない。自分の気持ちの通じない断絶の悲しみである。」と、関口は述べている。

以上のように先行研究では、先の田近や田島と同様に関口も、土工たちは、「ある言葉」を告げるまでは優しい存在であったのにも拘わらず、突然帰るように通告した土工たちの「ある言葉」は、良平にとって「冷たい他人の言葉」であり「裏切り」の言葉となったという見解を示している。

しかし、ここで考えたいのは、本当に土工たちの「ある言葉」は、良平にとって全く予期せぬ突然の通告であったのであろうか、ということである。なぜなら、この時の良平は、自らに迫り来る危機に対し、決して無自覚かつ漫然と時間を過ごしていたわけはなかったと考えるからである。

Ⅱ. 良平の危機意識

(1) 良平の心の変化

良平は、一軒目の藁屋根の茶店の場面及び二軒目の茶店の場面よりかなり以前の段階で、自分自身の中に危機意識を抱いている。二人の土工に話し掛けトロツコを押す許可を得た上で、一緒にトロツコを押し続けて登り詰めた「みかん畑の間」を下ってトロツコが停車した「竹やぶのある所」を境に、良平の気持ちに変化が認められるからである。

すなわち、「竹やぶのある所」以前の良平の気持ちは、急勾配の登り坂であってもトロッコを押すことができる喜びや満足感で膨れ上がっていたが、「竹やぶのある所」以後、良平の気持ちは次第に減退し萎んでいくことになる。なぜなら、これまで良平は、トロッコの重みについて何も形容していなかったが、この場面ではじめて「重いトロッコ」と表現し、トロッコを押す良平の意識と姿勢が、ここにきて初めて下向きになったと考えられる言語使用をしていることから窺い知ることができる。また、「竹やぶはいつか雑木林」となり、さらに「高いがけの向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた」場面において、「あまり遠く来すぎたことが、急にはっきりと感じられた。」と良平自らが自覚しており、良平の思考の中に「明確な不安」が認識されていることが見て取れる。これ以降、良平の心の中に不安と苛立ちは募り、さらに増幅され、二軒目の茶店での土工たちから告げられる「ある言葉」を聞くこととなるのである。

(2) 良平の深層

二軒目の茶店の前で、再度一人きりにされた良平の焦りについて、稿者は次のように述べている。⁵⁾

二軒目の茶屋に入った後の二人の土工の様子は、詳しく描写されていない。先の一軒目の茶屋では、「乳飲み子をおぶった」女将さんを相手に、「悠々と茶などを飲み始めた」土工たちの姿が、トロッコの傍らで待つ良平の視線で細かく描写されていたが、この二軒目の茶店の土工たちの様子は、物理的に良平の位置から窺い知ることができないためか、一切描写されていない。トロッコの傍らに腰掛ける良平の位置からでは、実際に茶屋の中を見通すことができないのかもしれない。トロッコに腰掛けながら良平は、茶店の前には花の咲いた梅の木があり、その梅に射す「西日の日が消えかかってい」ることを漠として見つめている。そして、「もう日が暮れる。」と深奥から実感するのである。

良平は、ただ漫然と腰掛けていることができずに、立ち上がって「トロッコの車輪をけってみたり」、「一人では動かないのを承知」で、トロッコを「うんうん」と「押してみたり」して気を紛らわせているしかないのである。この時点でも良平は、一人で家へ帰ろうとしていない。良平の脳裏では、土工たちと一緒に帰れないという可能性が次第次第に高くなってきているのではないだろうか。それと同時に、土工たちと一緒に帰れないことを無意識のうちに打ち消したい、受け入れたくないという思いのもう一人の良平が、良平自身の中に存在していたと考える。

良平は、土工たちと一緒に帰れないかもしれないという危惧が自分自身の中で徐々に膨らみ、それがもし現実となった時に、これから自分自身が遭遇するであろうと思われる苛酷な行く末を思い浮かべるたびに、そうしたことはどうか起こらないで欲しいという思いで、必死になってそれを否定し、またそれを遠ざけようとしていたのではないだろうか。

そのような状態にあったからこそ良平は、これまで幾度も機会があったのにも拘わらず、トロッコの行き先や帰り路のことについて、土工たちに尋ねることが出来なかったのではないか。もし自分が土工たちに行き先や帰り路のことを尋ねてしまったならば、土工たちが自分自身と一緒に帰らないことが明瞭判明になることを避けたがために、問うてみたい・聞いてみたい思いを必死に抑え込みながら、その問いを無意識のうちに否定してきたのである。もう少し踏み込んで考えると、良平は、意識的にその問いを打ち消し、飲み込んできていたのかもしれない。

つまり、良平は、土工たちと一緒に帰ることが出来ないということが現実になってしまう

ことに対する恐怖心ゆえに、不安が募っても焦りが生じて、決して土工たちに行き先や帰り路のことを問いかけたりすることが出来なかったのではないかと考えるのである。

ここでは、良平の思考の中に、土工たちと一緒に帰ることができないかもしれないという危惧が徐々に大きく膨らんでいたのではないかと捉えている。良平は、自分自身の危惧が現実となってしまった時に自分自身が遭遇するであろう苛酷な行く末を思い浮かべるたびに、必死になってそれを否定し、そうした思いを遠ざけようと潜在意識の中で忌避していたのではないだろうか。土工たちが「ある言葉」を告げた時とは、良平にとって全く予期せぬ突然の通告がなされた瞬間ではなく、懸命に自分自身の中で忌避してきた予感が、現実のものとなってしまった瞬間であったと考えることはできはすまいか。土工たちとの道行きの中で、良平の胸中に芽ばえた危機感が徐々に顕在化し、土工たちへの懐疑心、良平の苛立ちと焦りへと繋がる良平の心理の深層がその根拠である。

Ⅲ. 「ある言葉」は土工たちの「裏切り」なのか

(1) 土工たちの申し合わせ

ここでは、二人の土工たちの「ある言葉」は、果たして良平に対する土工たちの「裏切り」なのか、について考察していきたい。

本文では、二軒目の茶店における良平に対する土工たちの言葉について、次のように記している。⁶⁾

ところが土工たちは出てくると、車の上のまくら木に手を掛けながら、無造作に彼にこう言った。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向こう泊まりだから。」

「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するずら。」

土工たちのこの言葉は、二軒目の茶店から出て来て直ぐに、良平に告げられている。一人の土工が良平に告げたという可能性もなくはないが、一つ目の会話文と二つ目の会話文が同じ段落で連結しておらず、それぞれ別段落で記されていることから、二人の土工が各々連続して良平に告げたと考える方が自然であろう。すなわち、二人の土工の一方が、「われはもう帰んな。おれたちは今日は向こう泊まりだから。」と自分たちの今後の予定を知らせ、もう一方の土工が、「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するずら。」と帰宅時間が遅くなり過ぎると良平の家族が心配するという発言をしているのである。

「われはもう帰んな。」という土工の言葉は、先の『「いつまでも押していい?」』『いいとも。』』という良平との約束を意識した発言でもある。土工たちには、良平にこの言葉を告げる前、二軒目の茶店で休憩の合間に良平のことが話題になり、良平の今後について事前に思案していたのではなかろうか。

土工たちの「われはもう帰んな。おれたちは今日は向こう泊まりだから。」と「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するずら。」という発言は、簡潔かつ論理的であり、説得力を伴った言語表現である。二軒目の茶店から出てきた土工たちの一人が、トロッコの傍らで待つ良平を見て、直感的に、そして瞬時に発言したものであれば、相方の土工の反応にも「そう言えばそうだな。」等の「合いの手」が入るはずであろう。しかしここでは、土工たちの最初の発言である「われはもう帰んな。おれたちは今日は向こう泊まりだから。」と、次の発言である「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するずら。」との会話の間に、暇や

澁みが認められない。二人の土工たちの間には、良平の今後について、事前に何らかの申し合わせの時間的空間が存在していたと考えられるのである。

(2) 「通告」なのか「忠告」なのか

西垣 勤は、「ある言葉」を告げた二人の土工たちと良平との関係について、次のように述べている。⁷⁾

土工たちは、次の茶店にも入る。「茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。」良平は、「もう日が暮れる。」と思い、居ても立ってもいられない。そして突然、「われはもう帰んな。」と言われる。土工たちにとっては半ば面白がって連れてきたものの、面倒になったのだ。田近洵一氏が「初めての他者体験だった。」と言うが、そこまで土工たちに対して、良平は、一体感を持つところの状態では既になかったろう。

ここで西垣は、良平を「半ば面白がって連れてきたものの、面倒になったのだ。」として、土工たちの行動様式を説明している。土工たちが、良平からの申し出があったからとはいえ、長時間トロッコを押させながら帯同させてきたことは事実である。

これより前の一軒目の「わら屋根の茶店」の場面において、良平の存在が全く土工たちの眼中になかったわけではない。この場面ではむしろ、土工たちが、良平に対する一定の配慮を見せる部面も存在する。巻きたばこを耳に挟んだ土工（その時はもう挟んでいなかった）が、「茶店を出てきしなに」、トロッコの傍らにいる良平に対し、新聞紙に包んだ駄菓子をくれている。巻きたばこの男は、茶店から「出てきしなに」良平に駄菓子を渡している様子から、「偶然」に駄菓子をくれたのではなく、前もってトロッコの傍らにいる良平に駄菓子をやろうという心積もりをした上での所作であったと解することができる。「新聞紙に包んだ駄菓子」という表現は、土工たちが休憩中に「乳飲み子をおぶったかみさん」に依頼し、駄菓子を入れた「包み」を用意してもらっていたとも考えられるからである。

こうして見ると、土工たちのこの言葉は、良平との「『いつまでも押していていい?』『いいとも。』」という良平との約束を破棄することにはなるが、それは良平の今後のことを案じた当然の発言と言える。土工たちは、むしろ良平自身の口から帰宅することを告げる申し出を待っていたのかもしれない。土工たちの「ある言葉」は、遅きに失した感はあるが、「裏切り」ではなく、良平の帰り道を心配した「忠告」であったと考えられるのである。問題となるは、土工たちが「今日は向こう泊まり」であることを知らずに、帰りたいと言い出せずに焦りながら待ち続けている良平の気持ちが土工たちには伝わっていないことなのである。二軒目の茶店を出てきた土工たちが、良平に告げる際の様態を示す「無造作に」という言語表現に留意したい。良平と土工たちの両者間における危機意識の懸隔は、土工たちのこの言葉が二軒目の茶店に休憩に入る前ではなく、二軒目の茶店から休憩を終えて出てきた直後に告げられたことから窺い知ることができよう。

IV. 良平の自省と決断

(1) 自己責任

二軒目の茶店で休憩を終えた後、土工たちに「われはもう帰んな。」と「無造作に」告げられた良平は、一瞬呆気にとられながらも毅然とした決断を下すことになる。本文では、この場面について次のように記している。⁸⁾

良平は、一瞬間あっけにとられた。もうかれこれ暗くなること、去年の暮れ母と岩村まで

来たが、今日の道はその三、四倍あること、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならないこと、——そういうことが一時にわかったのある。良平はほとんど泣きそうになった。が、泣いてもしかたがないと思った。泣いている場合ではないとも思った。彼は若い二人の土工に、取ってつけたようなおじぎをすると、どんどん線路伝いに走りだした。

増淵恒吉は、この場面の良平の気持ちについて次のように述べている。⁹⁾

麦藁帽子の土工といい、この二人の土工といい、悪玉としては描かれてはいない。一人から良平は怒鳴られ、二人の土工からも無造作に予期しない「帰れ」ということばを言われる。しかし、悪質な人間ではない。とくに、後者の場合、情理兼ね備わったことばである。前者といえども、その土工にとって職業の上で大事なトロッコを子供たちに勝手に動かされては、たまったものではない。(中 略) ただ、良平の主観にとって、前者は、いかにも意地悪そうな土工であり、後者の二人が、期待はずれのそっけない土工として映ったというにすぎない。良平に即して言えば、良平をこうした不安・恐怖に導いたのは、良平が自らトロッコに夢中になったそのこと自体であったのであり、誰にもその責めを転嫁することはできないのである。

ここで増淵は、二人の土工たちからの「無造作に予期しない『帰れ』ということば」は、「情理兼ね備わったことばである」と把握し、その発言の妥当性を主張している。また、「良平をこうした不安・恐怖に導いた」のは、他の誰でもなく、「良平が自らトロッコに夢中になったそのこと自体であったのであり、誰にもその責めを転嫁することはできない」と指摘しているのである。

良平と二人の土工たちとの出会いは、良平自らの「おじさん、押してやろうか。」という積極的な投げ掛けを緒とするものであった。決して、二人の土工たちからトロッコを押してくれという依頼があったわけでもない。良平自らが、自分の意思で長時間トロッコを押し続け、乗り続けて二軒目の茶店まで来てしまったことも事実である。このようにして考えると、良平は、これまでの自らの言動に対し自責の念を感じていたと看取することもできる。

(2) 何故、良平は泣いて救いを求めなかったのか

では、土工たちの言葉は、八歳の良平にどのような影響を及ぼしたのであろうか。この時の良平は、自分自身の置かれている状況を必死に受け止め、認識しようと努めている。良平は、「ほとんど泣きそうになった」が、泣いてしまっていない。良平は、「ほとんど泣きそうになった」ものの、涙が出る前に「泣いてもしかたがない」と思い直しているのである。では何故、良平は泣いて土工たちに救いを求めなかったのであろうか。

田近洵一は、この場面の良平について次のように述べている。¹⁰⁾

良平は、こういうことになろうとは夢にも考えていなかった。彼は必ず土工たちと同じ道を引き返すものと思い込んでいた。二人の土工はやさしく親切だった。彼らは最初から快く良平を受け入れてくれたし、「新聞紙に包んだ駄菓子」もくれた。最後まで思いやり深く、「あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するぞら。」といって、良平の身を案じてもくれた。(中 略) しかし、重要なことは、良平は決して土工たちを恨もうとしないということだ。もちろん、自分がここまでついてきた軽率さを悔やもうともしない。ただ、一人になった心細さやさびしさに耐えながら、家にむかって必死に走り続けるだけだったのである。

ここで田近は、「こういうことになろうとは夢にも考えていなかった。」とし、土工たちの言葉が良平にとって予期せぬ突然の言葉として把握している。さらに、「必ず土工たちと同じ道

を引き返すものと思い込んでいた。」とし、良平は土工たちと共に帰路に着くことに何の疑いも持たずにいたと捉えている。こうした考え方に対する稿者の考えは、前節までにおいて少しく論じた。

また田近は、土工たちに帰るよう告げられた後、良平は「決して土工たちを恨もうとしない」とし、さらに「自分がここまでついてきた軽率さを悔やもうともしない」と述べている。田近の主張する前者の「決して土工たちを恨もうとしない」については、一定の理解を示すことができるが、後者の「自分がここまでついてきた軽率さを悔やもうともしない」という点については、疑問を呈したい。

平岡敏夫は、この場面について次のように述べている。¹¹⁾

しかし、それでは若さの方はどうなるだろう。他者としての人間一般に還元できないものがここにはありはしないか。八歳ほどの子供がこれだけの道のりをこの夕暮れにひとり帰れるかどうか、といったところまで、二人の若さは行きとどかないのである。トロッコを押させたり、駄菓子をくれたり程度はできるが、若さというものは物事を自分にひきつけてしか考えられず、せいぜい「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するずら。」程度であり、幼い子供にとっての距離や時間についてはそれほど深く考えられないのである。

若い土工のことは人間一般に拡大できぬことはないが、若さ故の無自覚・無分別と読むのが自然であり、それだからこそ土工をうらむなどといった次元にならずに（実は良平のみならず私たち読者もそうではないのか）、「良平は殆ど泣きさうになった。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる場合ではないと思つた。彼は二人の若い土工に、取つてつけたやうな御時宜をすると、どンドン線路伝ひに走り出した。」というふうに展開できたのである。

ここで平岡は、二人の土工の年齢の「若さ」に着目している。「八歳ほどの子供がこれだけの道のりをこの夕暮れにひとり帰れるかどうか、といったところまで、二人の若さは行きとどかない」とし、良平に対する若い土工たちの配慮のない発言を指摘している。さらに、二人の土工たちの言葉は、「若さ故の無自覚・無分別と読むのが自然であり、それだからこそ土工をうらむなどといった次元にならずに（実は良平のみならず私たち読者もそうではないのか）」、次の場面の「良平は殆ど泣きさうになった。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる場合ではないと思つた。彼は二人の若い土工に、取つてつけたやうな御時宜をすると、どンドン線路伝ひに走り出した。」へと展開できたとしている。

良平は、本当に「自分がここまでついてきた軽率さを悔やもうと」しなかったのであろうか。良平は、自分自身がここまで土工たちに付いてきてしまった軽率さを、心奥から後悔していたと考える。ここにこそ、良平が泣いて土工たちに救いを求めなかった理由が存在するのではなかろうか。

弱冠八歳の良平が、嗚咽を漏らしながら取り乱し、泣き叫ぶことによって、これまで一緒になって懸命にトロッコを押してきた土工たちに、救いを求めることは可能であったはずである。むしろそれが、土工たちの言葉に対する、八歳の良平の自然な反応ではなかろうか。しかしながら良平は、土工たちに一切救いを求めていないのである。

(3) 自省と決断

良平は、二軒目の茶店までの土工たちとの道行きの中で、迷いや不安を抱き始め、次第次第にその思いを膨らませてきた。つまり良平は、土工たちと一緒に帰れないかもしれないという

危惧が自分自身の心奥で頭を擡げても、そうした危惧が現実となることを恐れるがため、必死にそれを打ち消し、またそれを遠ざけようとしてきたのである。つまり良平は、迫り来る危機に対して確かに察知しそれを認識していながらも、その危機を意識的に自分自身から遠ざけ、それを認知しようとししない逃避行為を行ってきたのである。

こうした心理状態にあった良平は、これまで幾度も機会があったにも拘わらず、トロツコの行き先や帰り道のことについて、一度たりとも土工たちに尋ねることをしていない。いやむしろ、土工たちに尋ねることを敢えてしようとししない弱い良平がそこに存在していたのである。しかし、これまで、良平自身の心の奥底に隠蔽し回避してきた自らの心の脆弱さや判断の甘さは、土工たちのこの言葉によって白日の下に晒されることになる。この場面の良平には、自分自身の熟慮の足りなさや他者への甘え、一方的かつ過大な土工たちへの期待に対する自省の念が存在すると考える。

土工たちの言葉を聞いた良平は、自らの置かれた状況を十分理解した上で、冷静沈着な判断を下すことになる。良平は、「一瞬間あっけにとられ」ながらも冷静に現実を受け止め、帰路に関する三箇条の状況判断を行っている。すなわち、一つ目が「もうかれこれ暗くなること」という時間に関する事項、二つ目が「去年の暮れ母と岩村まで来たが、今日の道はその三、四倍あること」という距離に関する事項、三つ目が「今からたった一人、歩いて帰らなければならぬこと」という帰路の同行人数と交通手段に関する事項がそれである。良平は、帰路に関する三箇条の状況を「一時にわかった」としており、自分自身が置かれた状況を明晰に分析し決断を下しているのである。

良平が、土工たちに「ある言葉」を告げられ、あっけにとられた「一瞬間」は、良平自身の中で、これまで自らの力で解決すべき問題を安易に他者の力に期待・依存することにより、その問題から逃避してきた受動的な良平から、能動的な新しい良平へと脱皮した瞬間であると言える。まさにこの「一瞬間」は、良平が自らその問題と真正面から対峙し、積極的に自らの力で解決しようとする自己解決力が具備され、新生の良平へと一歩踏み出した瞬間であったのである。

つまり、良平自身が、これまでの自分自身の優柔不断な行動を見つめ直し、二人の土工たちへの身勝手な期待や依存によって自ら解決すべき問題を意識的に遠ざけ回避してきた行為を正し、今後再び同じ轍を踏まぬように厳重に自らに言い聞かせた戒慎の瞬間であったと考えるのである。

【引用文献】

- 1) 芥川龍之介作「トロッコ」『現代の国語 1』、株式会社三省堂、平成14（2002）年2月25日、160～162頁
- 2) 田近洵一稿「指導過程」、『文学教育実践講座〔中学校篇〕』、有信堂、昭和45（1970）年6月30日、115頁
- 3) 田島伸夫著『文学の世界に目をひらく読みの授業』、一光社、昭和57（1982）年7月10日、106頁
- 4) 関口安義編著『芥川龍之介作品論集成 第五巻 蜘蛛の糸 児童文学の世界』、翰林書房、平成11（1999）年7月28日、223～224頁
- 5) 拙稿「中学校国語教科書教材研究—「トロッコ」の考察を中心に—」、『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第46号、静岡大学教育学部、平成27（2015）年3月、31頁
- 6) 前掲1)の文献、161～162頁
- 7) 西垣勤稿「『トロッコ』論」、『芥川龍之介作品論集成 第五巻 蜘蛛の糸 児童文学の世界』、翰林書房、平成11（1999）年7月28日、232頁
- 8) 前掲1)の文献、161～162頁
- 9) 増淵恒吉稿「教材研究」、『文学教育実践講座〔中学校篇〕』、有信堂、昭和45（1970）年6月30日、108頁
- 10) 前掲2)の文献、115頁
- 11) 平岡敏夫著『芥川龍之介』、大修館書店、昭和57（1982）年11月25日、335頁

A Researching Ryunosuke Akutagawa through Japanese Language Teaching Materials “*Torokko*”

Hiroshi OHTSUKA

(Received October 1, 2015)

Abstract

Ryunosuke AKUTAGAWA (1892-1927) was born in Tokyo Prefecture. The first recorded example of his work *Torokko* ran in March 1922 edition of *Taikan*. Later, in May 1923, he had his first work, *Torokko* officially published. A fuller, revised version *Torokko* was included.

The textbook version of *Torokko* was published by *Syuuuei Tosho Publication* in 1950. It was selected for the first time as a teaching material for students aged 14 years or older. Since 1950, the textbook has been reprinted a number of times.

The main issues examined in the research of Ryunosuke Akutagawa, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of *Torokko* and those in the school textbook version.